

研究サークル成果等報告書

1. 研究サークル名

大学生・大学院生による共創学習コミュニティ

2. 研究サークル責任者名

西口優毅

3. 研究サークル活動期間

2025 年 12 月 ～ 2026 年 3 月

4. 研究会の趣旨と当年度の研究計画の概要

現代社会では、教育や研究の現場において「教える側」と「教わる側」といった関係が固定化し、双方向的な学びの機会が限られている。本研究サークルは、大学生・大学院生を含めた若手研究者にとって新たな研究（SI 研究の実践）としての関わり方を模索することを趣旨とする。

特に、若手研究者が小中高生の研究に協働することで、その実例から研究指導に関する相談を行い、研究そのものの捉え方を学び合う。そのため、大学教授にも参加いただき、研究の視点や指導のポイントを学び、実践できる循環を生み出すことを目指している。

これらの活動を通じて、若手研究者が主体的に研究や教育に関わり、社会と接続する力を養うとともに、若手研究者の育成および学会における学生会員の拡充に寄与することをめざす。

当年度の研究計画として、月 1 回の交流学習会を中心に活動を行った。研究会では、若手研究者が小・中・高校生への研究指導の実践内容を共有し、大学教授からの助言や講評を受けることで、指導力と研究力の向上を図った。また、「研究とは何か」といった研究そのものの本質に関わるテーマを設定し、対話形式の学び合いセッションや読書会を実施した。

5. 研究成果の概要（研究計画に照らして、何をどこまで実現できたか？）

当年度は計 3 回の研究サークルを開催した。以下に各回の詳細を記す。

<第 1 回>

研究の問いの立て方・キャリアの探究・科学と AI の未来についての総合的議論

参加者：西口優毅、日野皐汰朗、木佐貫拓真、根津創、今里滋（計 5 名）

概要：

参加者各自の近況報告と研究上の課題共有から始まり、「研究の問い（リサーチクエスチョン）をどのように立てるか」を中心テーマに議論を深めた。日野氏・木佐貫氏がそれぞれ担当する小中高生の研究指導においても同様の困難を抱えており、参加者共通の実践的課題として浮上した。

主要な議論内容：

1) リサーチクエスチョンの立て方

今里氏より、リサーチ・クエスチョンは研究全体の座標軸を決定するものであり、オリジナリティ・客観性が不可欠であること、「もう一人の自分との対話」や第三者との対話を通じて磨き上げていくべきであるとの助言があった。西口氏からは、まず小さな問いを立てて他者に発表し、フィードバックの質によって自分の問いの解像度を確認するトライアンドエラーの有効性が示された。

この議論を通じて参加者は、リサーチクエスチョンとは一人で完成させるものではなく、他者との対話の中で徐々に磨かれていくものであるという認識を共有した。根津氏は「言葉が社会性を帯びる」重要性を、日野氏は他者との対話による具体化の必要性を、木佐貫氏は自身の漠然とした疑問から出発するアプローチの有効性をそれぞれ再認識した。

2) 個人の学びとキャリアに関する対話

根津氏が提示した「学業と研究の接続」への悩みをきっかけに、個人のキャリアや学びのあり方について議論が展開された。今里氏より、「自分が好きなことをして食べていくのが一番良い」という経験に基づく助言と、いかなる環境でも学びは可能であるという示唆が与えられた。西口氏からは、やりたいことを周囲に言い続けることで協力者が現れるという実体験が共有された。

3) 話題提供「科学とは何か」（西口氏）

カール・ポパーの「反証可能性」の概念を基軸に、科学とは「現時点で反証されていない仮説」という定義を提示。自然科学と人文科学は対立するものではなく世界理解の両輪であること、また社会科学のように目に見えないものを扱う分野ではリサーチ・デザインが極めて重要であることを論じた。

4) AI と研究の未来

AI が研究効率を飛躍的に向上させるツールである一方、学生による安易な剽窃利用という倫理的問題も内包することを議論し、AI の生成物を利用する際は内容を自身で検証し説明責任を負う姿勢こそが研究における AI との健全な付き合い方であるとの結

論を得た。

決定事項：

- ・サークル名を「大学生・大学院生による共創学習コミュニティ」に正式決定
- ・月1回の定例開催を確立
- ・参加者5名によるLINEグループを立ち上げ連絡体制を構築

<第2回>

「協働研究」をテーマに小中高生への協働研究のあり方と学術的視点を深める議論

参加者：西口優毅、日野皐汰朗、木佐貫拓真、根津創、田中智裕、今里滋（計6名）

概要：

「協働研究」を中心テーマとし、2つの話題提供をもとに、小中高生との協働研究における理想的なあり方について深く議論した。

話題提供①：『協働知創造のレジリエンス』に基づく協働の考察（西口氏）

今里氏推薦の書籍を基に、「協働」の概念を小中高生との協働研究の活動に落とし込む考察を共有した。協働の本質を「点在する知識・専門性をつなぎ新たな価値を生み出すこと」と定義し、小中高生との協働研究における多様な主体（生徒・講師・外部専門家）の関わり合いそのものが協働であることを確認した。また協働における役割として「つなぐ人」「支える人」「育てる人」の3類型を整理し、協働のプロセスを「関係性構築」→「協働研究」→「成果の協働創造と発表」というステップで概念化した。

話題提供②：小中高生との「協働研究」に関する学びの共有（木佐貫氏）

「小中高生が研究に没頭できるメカニズムと、大学生・大学院生の協働のあり方」をテーマとした勉強会の内容が共有された。特に以下の知見が参加者の関心を集めた。

- ・講師は「教える者」ではなく、生徒と対等な「ファシリテーター・伴走者」であるべきという教育観の転換
- ・「探究」（自己に向き合う、個人の好奇心に基づき既存の知の理解を深めるプロセス）と「研究」（社会への創造的な活動として、未知の「フロンティア」で新たな知を創造し論文や発表を通じて社会に表明し批判を受け入れるまでの一連の営み）の明確な概念的区別
- ・小中高生の「やりたい」という意志を原動力とし、先行研究への動線作りや成果物の設計を逆算的に支援する大学生・大学院生の役割
- ・「私」を主語にしたアイメッセージでの語りかけが、小中高生との信頼関係を築き主

体的な学びを促進するという実践的知見

主要な議論と考察：

- ・子どもならではの自由な発想を研究として昇華させることが重要である（田中氏）
- ・「探究」は人生全体にわたる活動であり、その中で子どもたちの興味と「研究」として成立する範囲を重ね合わせる手助けが協働研究者の重要な役割であるという考察（根津氏）
- ・小中高生の主体性を尊重するために「待つ」姿勢と「問いの投げかけ方」のスキルを高める必要性（日野氏）

今里氏による学術的総括：

研究スタイルの歴史的変化（師弟モデルから協働モデルへ）、世代を超えた協働の意義、そしてヘーゲル哲学における「即自（An sich）＝探究」と「対自（Für sich）＝研究」という概念的整理が提供され、議論に学術的な深みが加わった。

決定事項：

- ・次回課題図書をマックス・ウェーバー『職業としての学問』に設定

<第3回>

マックス・ウェーバー『職業としての学問』読書会：学問・研究・探究の本質を巡る議論

参加者：西口優毅、日野皐汰朗、木佐貫拓真、根津創、柴田葉奈、河内洸樹、山本響、横田由真、安藤諒、今里滋、（計 10 名）

概要：

日野氏による書籍内容の発表を軸に、「事実認識と価値判断の分離」「学問における研究と探究の違い」「近代社会における教育者の役割」について多角的な議論を展開した。参加者が多様な専門分野（日本近現代文学・アフリカ博物館研究・デザイン・中国語・社会学等）を持つことで、議論の射程が大きく広がった。

発表概要（日野氏）：

書籍内容を3点に整理して発表した。

1) 生計としての学問

ドイツとアメリカの大学制度の比較から、大学の「アメリカ化」（有給・生活保障の代わりに大学の期待に応える構造）が進んでいることを指摘。

2) 学問への心構え

専門性の細分化が進む中、情熱（パッション）を持ちつつ虚栄心を排して対象そのもの（ザッヘ）に没頭することの重要性。学問は無限に続くプロセスの一部であるという認識。

3) 価値自由の原則

学問にできること（事実の確認・因果関係の解明・プロセスの提示）とできないこと（生きる意味の付与・善悪の価値判断）の峻別。教師の役割は「不都合な事実」を直視させ思考の道具を提供することであり、権威による価値の押し付けや政治家的な扇動は厳禁であるという原則。

主要な議論内容：

1) 事実認識と価値判断の分離

安藤氏は人文科学において事実と価値を完全に分離することへの疑問を呈し、ウェーバーが批判した「体験」が当時のドイツ青年運動と関連している可能性を指摘した。横田氏は、トピック選択の時点で恣意性が入ることを指摘し、完全な中立は理想論ではないかと述べた。根津氏は、ウェーバーの警告にもかかわらずヒトラーという指導者が求められた歴史的事実と、学問内での「明晰さ」維持の困難さを考察した。

2) 「研究」と「探究」の違い

木佐貫氏は、高校生向け探究学習の審査員経験から両者の線引きへの悩みを問題提起。ウェーバーが非合理的だとした「体験」こそが学問への情熱・好奇心の源泉（探究のスタート地点）となり、そこから合理的な「研究」につながるという仮説を立てた。柴田氏は、高校生の探究活動には「面白い球を投げる大人」の存在が重要だと指摘。今津先生は、日本の教育における「なぜ／なぜなら」という分析的思考訓練の不足をフランス教育との比較から指摘し、小中高生による研究がその訓練の機会として有意義であると評価した。

3) 教育者の役割と近代社会

木佐貫氏は、ウェーバーが示した教師の役割が協働研究をする者の目指す姿そのものであると述べた。横田氏は、神が死んだ近代における「体験」や「個性」への希求が政治的に利用される危険性、学問知が戦争に利用された歴史の悲しさに言及した。

参加者からの主な意見と考察：

・山本氏：プラトンの洞窟の比喻を引用し、経験という「影」の根源である「光」を

見ようとする努力が学問（概念の発見）につながるという考察

- ・柴田氏：研究が趣味的情熱から始まる一方で科研費獲得には社会課題との結びつけが求められるという矛盾、短期的成果を求める風潮が基礎研究を困難にしている現状への懸念を表明

- ・横田氏：研究費獲得でキャリアが評価される現状への違和感と、情熱を持って取り組める非合理性を大切にしたいという意思表示

研究会を通じて提起された本質的な問い：

- ・事実に対する判断と価値に対する判断は、本当に截然と分けられるのか？
- ・近代化・合理化が進んだ現代において、「体験」や非合理的な情熱は学問の中でどのように位置づけられるのか？
- ・高校生が行う「探究」は、ウェーバーの言う「学問・研究」とどう関係するのか？
- ・趣味のように始まる研究が、社会的有用性を証明しないと資金を得られないという矛盾をどう乗り越えるか？

決定事項：

- ・月 1 回の勉強会継続を合意
- ・5 万円の研究費は次年度に繰り越して活用する方向で調整
- ・次回テーマ：「小中高生のための研究とは何か」（2026 年 4 月開催予定）

総括

3 回の研究サークルを通じて、「研究とは何か」「探究と研究はどう違うか」「若手研究者・講師として小中高生の研究をどう支援するか」という本サークルの核心的問いについて、理論的・実践的両面から深く掘り下げることができた。

特に顕著な成果として、以下の 3 点が挙げられる。第一に、「探究」と「研究」の概念的区別の深化である。第 2 回・第 3 回を通じて、「探究」（自己内に完結する好奇心の深掘り）と「研究」（未知の領域で新たな知を創造し社会に問う営み）の違いについて、実践的・哲学的両面から精緻な理解が共有された。これは小中高生との協働研究にも直接的に活用できる知見である。

第二に、講師・指導者としての役割認識の更新である。「教える者」から「伴走者・ファシリテーター」への役割転換という視点が、各回の研究会を通じて多層的に検証・強化された。

第三に、研究サークルの拡大と多様性の獲得である。参加者は初回の 5 名から第 3 回には 10 名へと増加し、同志社大学・京都大学・京都工芸繊維大学・京都外国語大学など複数の大学・研究機関にわたる多様な専門背景（文学・社会学・デザイン・人類学

等）を持つ参加者を得ることができた。この多様性が各回の議論の質と深みを大きく高めた。

なお、研究費については当年度の使用には至らず、次年度へ繰り越し活用する予定である。

6. 次年度継続の意向（※どちらかに○をつけてください。）

あり（○） なし（ ）

7. 研究費の収支報告（※必要に応じて表の行を増やしてください。）

日付	摘要	収入	支出	備考
2025 年 11 月	学会より研究費交付	50,000 円		当年度配分
	——		0 円	当年度支出なし
	合計	50,000 円	0 円	残額 50,000 円 を次年度に繰り 越し